

審査の結果の要旨

論文提出者氏名 伊藤（安田）正子

本論文は、中国との国境地帯に居住するタイ族、ヌン族というベトナムの少数民族が、ベトナムの国民国家の形成との関わりのなかで、そのエスニシティをどのように創生していったのかを、ランソン省ヴァンラン県タンラン社という調査村の20世紀後半の歴史を軸にして検討したものである。

本論文は5部から構成されている。

第Ⅰ部「王朝・植民地支配期の“タイ族”“ヌン族”」では、タンラン社の歴史に即しながら、ベトナムの前近代王朝の時代からフランス植民地時代にかけての、中越国境地帯のタイ系民族のあり方が検討されている。そして、「タイ」と「ヌン」の区別が、中国からの移住の歴史の長短、つまりは「土着」と「新参」の格差に由来するものであるとされている。

第Ⅱ部「革命運動とタイ族・ヌン族の貢献」では、抗仏・抗米戦争という、ベトナムの国民国家としての形成をもたらす革命運動への参加を通じて、タイ系の人々が、「ベトナム国民」という意識をもつと同時に、タイ族・ヌン族という民族意識にも目覚めていく過程が検討され、両民族の距離感が縮まり「タイ・ヌン族」としての一体化が進んだことに示される、国民化と親和的な形でエスニシティが創生されていく様が描かれている。

第Ⅲ部「土地政策と土地所有」では、1945年の八月革命以降最近までの政府の土地政策とタンラン社での土地所有の変動が検討されている。まず土地改革と合作社の形成が、タイ族・ヌン族の接近を促進したことが指摘され、ついで中越戦争の頃から、国家政策への独自の対応がはじまり、合作社の解体と「祖先の土地取り戻し」が新たな貧富の格差をつくりだし、中部高原への「自由移民」の動きを生み出したとされている。

第Ⅳ部「教育の変遷」では、1945年以降のベトナム国家の国民教育によりタイ族だけでなくヌン族の間にもベトナム語が普及したことが、両者を接近させる要因になったことが分析され、それが1960年代に両者の言語を一つに括る「タイ・ヌン語」の正書法の形成に結びついたが、すでにベトナム語が普及していたことが「タイ・ヌン語」教育への消極的反応に帰結したとされている。

第Ⅴ部「中国との関係」では、中国という国家、および中国の壮族という同系民族が、タイ族・ヌン族の社会にどのような影響を及ぼしてきたのかが検討されている。ここで指摘されていることは、国境を越える広がりをもっていたタイ系の民族の世界が、1945年以降は日増しに「国家」に強く規定されるよ

うになっていったということである。その一つの現れが、1940年代後半には華僑を名乗る動きのあったヌン族が、1970年代末の中越戦争の時期には、タイ族との一体化を強め、華僑とは明確に一線を画するようになっていたということである。ドイモイ以降、中越国境地帯での貿易の活性化で、一面では国境をまたぐ民族の世界の回復と見られる現象も広がっているが、それもタイ族・ヌン族に即して言えば、あくまでも自らが国家に規定された存在であることを受け入れた上で、経済的な利益を中心に民族の世界を展開していると見るべきものであるとしている。

以上のように本論文は、中越国境地帯のタイ族・ヌン族というエスニック・カテゴリーが、20世紀の同地域の歴史的変動、特にベトナムと中国関係という国際関係のなかでどのように機能してきたのかを解明し、少数民族の側からベトナム現代史を再構成する、きわめて意義ある研究成果である。ベトナムの少数民族地域での本格的なフィールド・ワークは、1990年代になってようやく外国人研究者にも可能になったものであり、本研究はフィールド・ワークをふまえたベトナム北部の少数民族に関する外国人研究者の本格的成果としてはほぼ半世紀ぶりの貴重な業績である。

本論文の従来の研究への貢献は多岐にわたるが、若干の具体例をあげておきたい。まず本論文は、「タイ族」の出身者が中国にわたり、時間を経過してベトナムに再入植した際に、「ヌン族」と見なされるようになっていた事例の発掘などを通じて、タイ族・ヌン族というエスニック・カテゴリーが、ベトナムと中国とのかかわりの相違を示すものであったことを解明している。

また、抗仏戦争・抗米戦争を通じて、ヌン族のベトナム国家との関係が強化されるなかで、タイ族とヌン族の間のエスニック・バウダリーは低くなり、「タイ族・ヌン族」とでも呼びうるようなエスニシティが創生されつつあるという論点を、実証的に明らかにしたのも、本論文の貢献と言えるだろう。

本論文は、タイ族とヌン族のエスニシティは、ベトナム国家に反発して分離独立を求めるような方向性ではなく、むしろベトナム国家に対する帰属意識を高めるなかで活性化していること、しかしそれは彼らの存在がベトナム国家に組み込まれるという消極的な過程ではなく、近年のベトナム中部高原への「自発的移住」に見られるように、国家政策の束縛を越えて新しい生活圏を切り開く活力ももっていることを指摘している。前者のような論点は、エスノ・ナショナリズムがもたらす深刻な民族紛争が多発する現代世界にあって、民族の別の可能性に着目したものとして貴重であろう。

ただし、タイ族とヌン族のエスニシティのベトナム国家との親和性を強調するあまり、当該民族の動きを国民国家の枠組みの中に「押し込め」てしまっている面があり、これが中部高原への「自発的移住」のような動きの分析を論

文全体の文脈からは「浮いた」ものになっている弱点が存在する。

もっともこの弱点も、少数民族から見たベトナム現代史を提示した本論文の基本的価値を否定するものではなく、本論文は博士（学術）の授与に十分に値する業績と判断される。